



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

『自転しながら公転する』（新潮社）書店でこの本を見つけたとき、すごいタイトルだなと思わず唸りました。この作品を始め、多くのベストセラー小説を世に出された作家の山本文緒さんが、10月13日に長野県内の自宅で亡くなりました。享年58。死因は膵臓がんとの発表です。今から7〜8年ほど前、長年うつ病を闘病されていた女性の患者さんから、山本文緒さんのことを教えてもらいました。

直木賞に決まり記者会見する山本文緒さん（2001年1月）



227 作家 山本文緒

なせ、うつ病になったか。原因はよく分からないとしながら、02年6月にあるトラブルをきっかけに「どんな株価を落とす不良債権を抱えた銀行のように体調が悪くなった」と記しています。その後、入院を繰り返し、執筆することさえ難しくなった時期もありました。うつが酷い時期に、胆のう炎が発覚し、胆のう摘出手術も行っています。希死念慮（きしねんりょ）死にたいと願うこと）に駆られたこともありました。献身的な夫やスタッフに支えられ治療を諦めませんでした。そして06年3月、夫と旅行先でテニスをしたとき、「ああ、私はもう大丈夫だ、こんなに心から楽しめるならもう大丈夫」と目の前が開けたように感じ、回

うつ病を克服し作品に深み

「私の大好きな作家さんもうつ病で、闘病の日々を綴った本があります。先生にも読んでほしいです」と渡されたのが、『再婚生活 私のうつ闘病日記』（角川文庫）でした。僕は、どんな病気であっても、当事者が書かれたもので話題になっていく本は、極力目を通すようにしています。医者には絶対に書けない視点が必ずありますから。特にこの本は、プロの小説家が書いたものですが、うつの辛さが手に取るようにわかりました。

復へと向かいます。うつ病の人が辛いのは、いつ治るかわからない、出口の見えないトンネルに一人置かれたような状況になるからです。そこで欠かせないのは、周囲の人々が絶対に手を離さないこと。信頼感です。この本で僕は、山本文緒の夫の優しさに拍手をしました。うつ病の人は時として、「ただ怠けているだけ」に見えることがあります。でも決してそうではない。働けないことが一番辛いのは、いつだって御本人なのです。

山本文緒は、『プラナリア』（文春文庫）という作品で直木賞を受賞してから約2年後の2003年、40歳のときに思うように体が動かさず、精神科へ。医師から「抑うつ状態の悪化」を指摘され、入院を勧められ

山本文緒は07年から再び小説を書き始めます。復帰後初長編が『自転しながら公転する』。うつ病を経験されたことで、作品により深みを増したのだと、先の患者さんが教えてくれました。